

都市と水辺デザイン ペルー・アメリカ・スペイン



神谷 佐菜

中央リマク川を挟んで、左右側リマク地区

私の母親はペルー出身ということもあり、幼いころからペルーと日本を行き来してきた。

大学三年生の春休みに三か月ほどペルーのサン・マルティン・デ・ポレ



リマク地区(橋の向こう側と呼ばれる地区)写真でも警備が見回っている。

ス大学に行った。三月というのはペルーにとつては雨期だ。私が住む地域で降ることはあまりないが、熱帯雨林の方では沢山降る。リマク川は、例年のように氾濫。三月は新学期が始まる時期で多くの子供達が学校へ行けなくなった。なぜ政府は毎年氾濫するこの川を放置するのか理解できなかった。リマク市は二〇三五年計画にリマク川をリマの顔としてよみがえらせる計画を練っていた。しかし、政府上層部の人材の入れ替わりに伴い、リマク川に当てられるはずの資金は高速道路へ。河川は都市の魅力向上に是非活用して欲しい要素だが、現状では市民が楽しめるような環境ではない。毎年のように氾濫するリマク川は市民に嫌われ、まるでゴミ箱のような扱いをされている。そこで、卒論では、どうしたら人々が都市生活を通して、より水辺空間を楽しむことができるのか、スペインのベゾス・ビルバオ、アメリカ

カのサンアントニオとリマク川を比較した。

リマク川以外の川の変貌

ベゾスはバルセロナの代表的な都市計画22@BCNに組み込まれている。ベゾス川周辺の自治体が独立した決断力を持ち、ベゾス川事態が管理能力を持っている。オリンピックを転機に変えていこうとした点ではリマク川と同じである。

ビルバオでは、氾濫するたびに市民は困っていた。おまけに水質が悪く、市民が申し立てしたため、建築家シーザー・ペリにより産業都市から創造都市に生まれ変わった。

サンアントニオでも同様に暴れ川時代から市民の申し立てという経緯を通して、ハグマン計画リヴァー・ウオークより観光都市として生まれ変わった。

各地域の比較

どの事例においても、暴れ川時代はある。もともとは自然河川から始まり、都市化が進むに連れて、洪水や水質汚染の問題が現れる。そして、問題が発生すると各河川で改善のきっかけとなる出来事が起きる。それぞれの河川で、市民が改善要求をするたびに市や地元団体が対応し、より良い都市空間の為に発展する。

リマクでは、水質汚染、環境汚染、



リマク川付近に立つクリストファー山は、違法に建てられた小屋でスラム街になっている。しかし、最近ではカラフルな小屋がインスタ映えとしてカメラマンがこぞって来ている。

住民の意識・対応、洪水対策、社会的壁の五つの点が問題だ。特に住民の意識はリマク川の改善に当たって最も重要である。リマク川周辺の住民の意識が欠如している現状では、市が仮に綺麗にしたところで、ゴミのポイ捨てや汚染は繰り返されるだろう。

また、行政内の汚職は許されるべきではない。時々、リマク川に充てる資金がポケットマネーにされていると聞く。リマク川と同様に綺麗に出来ればいいのだが。

今年、私はスペインのバルセロナ大学の都市デザイン研究科を受験する。都市デザインを芸術・都市・社会の観点から研究し、卒業したら、スペインでしばらく働きたいと思っているが、機会があればリマク川に携わりたい。